# D. H.ロレンスの“The Lovely Lady”覚書き
## ――母親の変貌――

豊国　孝

### *i*

“The Lovely Lady”はアスキス夫人（Cynthia Asquith）編集の *The Black Cap: New Stories of Murder and Mystery*（1927）に掲載されたロレンスの短編小説である。この短編は『てんとう虫』*The Ladybird*（1923）のなかの“The Ladybird”、「狐」“The Fox”、「大尉の人形」“The Captain's Doll”や「木馬の勝ち馬」“The Rocking-Horse Winner”（1926）、「馬で去った女」“The Woman Who Rode Away”（1928）、『逃げた雄鶏』*The Escaped Cock*（1929）などと同様にオカルト的要素の強い小説である。ロレンスの晩年はオカルティズムの対する関心が深く、神秘的なもの、キリスト教的なものに対立するもの、人間の暗部[1]を描いたといえる。これは近代科学の合理性に対する反発、感性理論の復活でもあった。

この小論ではロレンスの初期の傑作『息子と恋人』*Sons and Lovers*（1913）で概して好意と共感もって描かれていた母親像が、“The Lovely Lady”では太母的なもの、“Magna Mater”として、さらには、醜い魔女的なイメージに変貌して描かれることに注目してこの作品を分析することにする。

### *ii*

まず、この短編のヒロインのポーリン（Pauline Attenborough）は72歳にもかかわらず、歳をとらず、シックな美しい女性であると描写される。薄明りの

中では30歳位にしか見えず、エトルリアの女のように完璧な素敵な頭蓋骨と可愛くナイーブな歯を持っている。しかし、彼女の若さの秘けつは何よりも意志力の強さに依るのだ。

> Her face was a lovely oval, and of that slightly flat type which wears best; because there is no flesh to sag. Nothing sagged about Pauline Attenborough. Her nose rode serenely, and her witty spirit travelled continually over its finely-curved bridge. . . .
> And then Pauline looked like *a Leonardo woman of a freer age*, who would not afraid to laugh outright, with a full, rich, mocking laugh.
> (italics mine) (244)

上記のヒロインの描写は評論家 Walter Pater が『ルネッサンス』*The Renaissance, Studies in Art and Poetry* (1873) のなかで、レオナルド・ダ・ヴィンチ描く「モナリザ」という女性が人生の秘密を知って何千年も生き続けていることを示している、と述べていることを参照していると思われる。

> She is older than the rocks among which she sits; like the vampire, she has been dead many times, and learned the secrets of the grave; and has been a diver in deep seas, and keeps their fallen days about her; and trafficked for strange webs with Eastern merchants; and, as Leda, was the mother of Helen of Troy, and as Saint Anne, the mother of Mary; and all this has been to her but as the sound of lyres and flutes, and lives only in the delicacy with which it has moulded the changing lineaments, and tinged the eyelids and the hands. The fancy of a perpetual life, sweeping together ten thousand experiences, is an old one; . . . Certainly Lady Lisa might stands as the embodiment of the old fancy, the symbol of modern idea.[2]

ペーターがモナリザを歳を超越して生きる永遠なる女性、太母的で魔女的な女性として理解したと同様に、ロレンスも冒頭から主人公が美しく魅力的だが、年令不詳の魔女ということを暗示する。彼女のことを客観的に見ているのは、居候として叔母と同居しているセシリア (Cecilia) だけなのだ。不器量で、目立たないセシリアは、30 歳で収入もない女性である。

> Her niece Cecilia was perhaps the only person who knew the working of the little wire which connected Aunt Pauline's eye-wrinkles with Aunt Pauline's competent will. Only Cecilia coldly watched the eye go old and haggard and tired as if they were centuries old, monkey-old; when Aunt Pauline was alone. (244)

セシリアはポーリンが強い意志の力で自分の若さや美しさを維持していることに気づいている。とくにロレンスは人間の意志力というものに対しては批判的である。何故ならそれは、女性の所有欲や知識欲と関連しているとロレンスは考えているからである。ポーリンが気を付けていない時には、彼女は歳をとった老婆なのだ。

ポーリンには愛する息子のロバートがいて、一緒に暮らしている。

> Robert, Aunt Pauline's son, went to town every day, driving his own car, to his chambers in one of the Inns. He was only thirty-two years old, born when Aunt Pauline was forty. He was a barrister, and he went to town every day, and actually he made, one way or another, about a hundred pounds a year. (246)

ロバートは不器量で、背も低く、がっちりとした男性で、太って見える。法廷弁護士であるが、あまり稼ぎも良くなく、性格も内気で彼を支配する母親の影響下にある。息子を愛している母は息子の全ての能力を吸いとってしまってい

る。いとこのセシリアだけが彼の内面的な魅力や情熱に気づいている女性である。ロバートが自分に好意を持っていることを彼女は知っているが、それが現実の行為として実行に移されるには、彼が母という存在を払い落とすことが必要なのだ。そのことさえロバートは意識していない。

ロバートという男性は大人としての成熟度が足りない、幼児性を持った人間である。ラカン（J. Lacan）のいう、まさに鏡像段階にいる男性といえよう。

> これと同じことが、子供が最もその愛情を向ける母親の前でも起る。その乳時期、母親の懐に抱かれて母子一体の共生的段階にある子供は、母の瞳を見つめ、そこに映る彼女の望むもの、母の渇望する対象になりたいと思う。当然の帰結として、子供は母の欲望の対象に理想的に同一化することで、彼の欲望は母親の欲望の欲望として形成されてくる。[3]

さらに、物語では父親の不在ということも、ロバートが母親の欲望や呪縛から離れられない原因の一つでもあろう。ポーリンは離婚しており、その夫についてはこのストーリーでは殆ど触れられていない。夕食後セシリアが退室すると、母と息子は水入らずで裁判に関する古文書の解読を楽しむ。その様子はまるでロバートが母親にたいして、年上の男性のように振舞うと描写される。いわば、近親相姦的な関係として、妻に対する夫としての役割をロバートが演じているのである。この異常な関係は、1913年に出版された『息子と恋人』でのポール（Paul Morel）と母親のガートルード（Gertrude）の関係と同様である。夫に不満をもつ母は息子との強い愛情を深めていくのだ。ロレンスは1918年11月のKatherine Mansfield宛の手紙のなかで次のように書いている。

> Beware of it — this mother-incest idea can become an obsession. But it seems to me there is this much truth in it: that at certain periods the man has a desire and a tendency to return into the woman, can make her his goal and end, find his justification in her. In this way he casts

himself as it were into her womb, and she, the Magna Mater, receives him with gratification. This is a kind of incest.[4]

こうした母親と息子の母子相姦的な異常な絆はロレンスの作品のなかで繰り返されるテーマといえよう。母親は息子に生を与えると同時に死をも与えるユングのいう母たるもののイメージ、“Great Mother”といえよう。[5]

ロバートが一人前の男として成熟するためには、この太母である母との膠着した状態から抜け出すしかない。つまり、自我が主体性をもって確立しいてゆく過程において、それをあくまでも自分の胎内にとどめ、呑み込んでおこうとする太母との戦いを経験しなければならない。[6] ロバートは母のもとを去り異性と結婚し独立する必要がある。それを助けてくれるのがポーリンの家に居候しているシス（セシリアの愛称）という女性である。物語の冒頭では器量もあまり良くなく、目立たない平凡なオールドミスとして、ポーリンに無視されていた彼女の出番となる。Janice Hubbard Harris は“The Lovely Lady”にはおとぎ話のモチーフが用いられているという。そして、悪意を持った魔女と戦う勇気ある挑戦者は、「眠り姫」や「白雪姫」に登場する「救いの王子さま」[7] なのである。しかし、この小説では、性別が逆転して、囚われているのが男性のロバートで、救い手が女性のシスということになる。

ある日の午後のこと、ポーリンは何時ものように若さを保つために庭の人目につかぬ場所で日光浴をしていた。シスは見張役として日光浴の準備と後片付けをするのだが、いらいらして自分も厩の屋根の上で日光を浴びることにする。すると彼女の耳もとに不思議で無気味な声が聞こえてくる。

“No, it was not my fault. For that I can't be blamed. No, Robert my child, you must not try to blame me that Henry died instead of marrying his Claudia. I was quite, quite willing for him to marry her, unsuitable as she was. But when he had been to see me, he realised his own false position, and I suppose that was it.” (252)

はじめ、シスはあたりに人がいないのに声だけが無気味に聞こえてくるために、恐怖に囚われてパニック状態になる。やがて話しの内容から、叔母のポーリンが腹話術かテレパシイを使用しているのではないかと疑うが、次第に冷静になる。それは屋根にある雨樋のパイプを通して聞こえてきたことに、シスは気づきほっとする。ポーリンは罪の意識にかられて、無意識に声を出していたのだ。その内容は次のようなことである。ポーリンが最愛の長男であるヘンリー(Henry)の死んだ原因が、自分が彼の結婚に反対したためではないという言い訳なのである。ヘンリーは愚かな女優のクローディアと恋に落ちたため、母との愛の板ばさみにあい、心が混乱したままで死んでいったのだ。愛する息子の死に対する罪の意識がポーリンの心を苛めていたことを、つまり、彼女の魂の秘密をシスは知ったことになる。したがって、アスキス夫人が希望した「殺人物語」として、この短編での第一の殺人は母による長男の殺害ということになる。今ポーリンが同じことを次男のロバートにしようとしていること、いわば、第二の殺人が行われようとしていることにシスは激しい怒りを覚える。

この図式は『息子と恋人』の中で、ガートルードと長男ウイリアム(William)と恋人ウエスタン嬢(Miss Western)の関係と重なってくる。母親のガートルードと婚約者に対する愛の板ばさみになったウイリアムは悩むのだが、やがて丹毒で命を落としてしまう。つぎに、母の愛は次男のポールに向けられることになり、彼はミリアム(Miriam)に対する愛と母への愛に大いに苦しむことになる。[8]『息子と恋人』では登場人物の性格や心理がリアルに描かれているが、"The Lovely Lady"ではもっと客観的に距離を置いて描写されている。しかし、この短編小説の中にロレンス自身の体験が生かされていることは疑いもないことである。それもかっては母のイメージに共感して描かれていたのに対して、この作品では母親像は皮肉に、辛らつに客観的に描写されているのである。

ポーリンの本性を見抜いたその晩のこと、シスはロバートに自分をほんの少しでも愛して欲しいと頼むが、彼はまだ太母としての力をふるっているポーリンの影響下にいる。ロバートは今までに誰かに肉体的な欲望を感じたことがないとシスに告白する。こうして、ポーリンのイメージは美しく魅力的な女性か

ら恐ろしい魔女的な女性へと変貌してゆく。

> And Ciss knew it wasn't true. The thought that Aunt Pauline might know what she, Ciss, had said was somehow paralysing. When Aunt Pauline knew things, she seemed to be able to kill them with a smile. Her mysterious power of mockery, jeering at one, made one go tangled up and perverse inside, till one absolutely cared about nothing.
>
> No, there was nothing to do but to fight her. Ciss said Goodnight, and went away to her rooms. (259)

若い二人にはまだポーリンと戦う力はないのだが、戦うしか他に方法はない。ロバートはポーリンが全能の神であり、自分は「愚者の楽園」にいるのだとシスにいう。そのパラダイスには誘惑も堕落もないのだ (260)。このシーンではアダムとイヴの楽園の神話が意図的に使われ、神であるポーリンはイヴであるシスがアダムのロバートを誘惑して、自分に反逆しょうとしていることに激怒する。

## *iii*

ポーリンの独り言を聞いた後、また日光浴をしている折り、シスはロバートの消極的な性格に腹を立てて、屋根の上で日光を浴びていた。すると、前の日光浴の午後と同じように、ポーリンが無意識に独り言をいいはじめる。それは、実はロバートが前に別れた夫の子供ではなく、イタリアのイエズス会の高僧である愛人マウロ (Mauro) の子であった。シスは今まで疑っていた真実を知り、さらにポーリンが自分のことをロバートという魚を釣り上げようとしている猫だというのを聞き、ヘンリーになりすまして、「ロバートをほっておけ、ぼくを殺したようにロバートを殺すな」という。さらに若い二人の結婚を許すようにと加える。このあたり、シスという女性はなかなかしたたかで、抜け目のない

人間であることが明らかになる。さらにポーリンにむかって「おまえは邪悪な女で残忍な母親だ。ぼくが死んだのはおまえのせいだ」(264)ととどめをさす。シスは今まで自分が無視され続けたことに対する怒りと、ロバートの命を救うために、はっきりと母親としてのポーリンの罪を告発する。

その日ポーリンはお茶の時間も降りてこず、やっと夕食時に誇りも意志の力も失ってやってくる。一方シスは念入りにお洒落をして、ロバートが帰宅するのを待つ。着飾ったシスを見てロバートは驚いたように、「今夜のきみはとても素敵だ」といい、二人は母のポーリンが降りてくるのを待つ。叔母が降りてくると同時にシスは、故意に灯りをあかあかと付ける。明るい光の中でポーリンはまるで老いた魔女のようにちじんでしまたかのように見えた(267)。このシーンはハリス (J. H. Harris) の主張するように、『オズの魔法使い』*The Wizard of Oz* でドロシィ (Dorothy) が邪悪な北の魔女に水をかけ、魔女がちじんでとけてゆく場面と似ている。[9] ロレンスは意識的におとぎ話のテクニックを用いて、強力な意志で永遠の若さを保とうとするポーリンの徹底的な敗北を描き出している。ポーリンはロレンスの作品の中でも、「子供をむさぼり食う母」"the maternal devourer"[10] の典型的女性といえよう。

ルダーマン (Judith Ruderman) もこの "the devouring mother" について以下のように述べている。

> No list of Lawrence's "devouring mothers" is complete without Frieda, the only woman he actually called by that term. The Lawrence's marriage was never a placid affair, in part because Frieda's desire to see her children conflicted with Lawrence's need for her single-minded attention to him.[11]

こうした「子供をむさぼり食う母親」のイメージはロレンスの実生活での母親リディアとの恋人同士のような異常な結びつき、そして、さらに父親のもとに残してきた三人の子供たちを恋しがる妻フリーダとの体験を反映していると思

われる。子供を異常に愛し、支配したい母親のイメージに対する作家自身の反発がポーリンという女性を厳しく描くことになったのではなかろうか。1926年に出版された短編「木馬の勝ち馬」“The Rocking-Horse Winner”でもやはり独り息子を金銭欲から殺してしまう母親が描かれたが、これほどまでに突き放しては描かれていない。しかし、おとぎ話のモチーフは同じように用いられている。[12]

ストーリーに戻るが、ロバートは変身してしまったポーリンに「おや母さん、あなたは小さな老婦人だ」という。ポーリンは砕けてしまった美しいベネチアガラスのように醜く嫌な魔女へと変貌してしまう（267）。彼女は美しく魅力的な母親というマスクを脱いで、魔女の本質を暴露することになる。

> The eyes of the two young people met. He understood what was happening. He and Ciss were two rebels destroying silently and relentlessly the old authority. But he did not know the secret of the rain-pipe. That she would never tell him. That was part of her own private battle, in which the man should not be mixed up. It was too ridiculous also. (268)

今まで無力だった若いロバートとシスが神的存在として君臨していた母、古い権威を無情に打ち倒す反乱者となるのだ。結婚するという二人に、ポーリンはすべてを告白する。彼女がセシリアとロバートの結婚をいとこ同士であると反対していたのは、実は二人は血縁関係にないので、嘘だったということも明かす。彼女は憎悪をこめた目で息子とシスを見て、「すぐ結婚してしまいなさい」と、二人をあざ笑う。

この対決のあと一週間がすぎポーリンは花が萎むように、樹木が枯れるように心臓発作をおこして死んでゆく。

> She was a dreadful sight to look at, like a creature which has

suddenly lost its soul, and become a jangling arrangement of shrieking nerves. She could not be still; she never slept. All the time she paced about, nervously twisting. Her face was wrinkled and *evil, hideous* with *malevolence*. It was awful for her and for everybody.

(italics mine) (271)

上記の引用でも明らかであるが、ポーリンを描写するのに「邪悪な」、「いやらしい」、「悪意」といった単語が繰り返されて、彼女の醜さが強調されるのだ。彼女の死顔はまるで幼いが老いた子供のようにさえ見えた。ポーリンは頑に自分の意志に従って生きようとしたが、失敗したのだ。若い二人を自分の意志どおりに支配しようとした。彼女はまるで美しい仮面をかぶった吸血鬼のように、息子の命を餌にして生きようとしたのだ。しかも、あの世からも彼女は悪意に満ちた攻撃をおこない、遺産のごく僅か2千ポンドが若い二人に残され、あとの全ては「ポーリン・アテンボロー博物館」に寄贈されてしまう。

"The Lovely Lady" は一見アスキス夫人の期待する「マーダー・ストーリー」とは違うように思われるのだが、ポーリンによるヘンリーの殺害、そしてある意味ではロバートとシスによる母親の殺害とみなすこともできるのである。ロレンスは俗的な意味での「殺人物語」や「ミステリー」とは違う視点から、この短編を描いているのである。しかも、おとぎ話というモチーフを利用して、距離をおいて登場人物を皮肉に描写している。ヒロインの美しく魅力的な母から醜く、邪悪な魔女への変貌ぶりも見事である。また、平凡で内気なシスが愛するロバートのために強くしたたかな女性へと変わってゆき、さらに、彼を支配する母親の邪悪な魔女的本質を非情なまでにあばいてゆくのも面白い。しかも、この短編小説での破壊的な母親像に対する厳しく批判的な描写は、作家ロレンスの実際の体験から由来していると考えられる。

## 註

“The Lovely Lady”のテキストは *The Woman Who Rode Away and Other Stories*（Cambridge UP, 1995）を使用した。

[1] 紀田順一郎「オカルトの系譜」，『英語研究』63（研究社，1975）6.

紀田はオカルト的なものは、西欧における土着的なもの、キリスト教に対立するもの、人間精神の暗部のシンボルとする。

[2] Pater, Walter, *The Renaissance, Studies in Art and Poetry* (Kenkyusha, 1929) 98.

[3] 福原泰平『ラカン ── 鏡像段階』（講談社，1998）75-6.

[4] Lawrence, D. H., *The Collected Letters of D. H. Lawrence I* ed. Harry T. Moore (Heinemann, 1977) 565.

[5] 河合隼雄『ユング心理学入門』（培風社，1968）91.

ユングは母なるもののイメージは、全人類に共通に認められるものであるが、個人的な実際の母親像とは区別して「太母」とよぶ。

[6] 『ユング』283.

[7] Harris, Janice Hubbard, *The Short Fiction of D. H. Lawrence* (Rutgers UP, 1984) 229.

[8] See Chapter VI “Death in the Family” in *Sons and Lovers* (Cambridge UP, 1992).

[9] Harris 229.

[10] Harris 229.

[11] Ruderman, Judith, *D. H. Lawrence and the Devouring Mother* (Duke UP, 1984) 14.

[12] See 豊国孝「D. H.ロレンスの『木馬の勝ち馬』覚書き ── オカルティズム」『文化と言語』58（札幌大学外国語学部，2003）.

拙論ではオカルティズムの視点からこの短編を分析したが、主人公の少年

ポール（Paul）は母親の金銭欲のため破滅させられる。母から「幸せとはお金がどんどん入ってくることなの」といわれたポールが、母の欲望を満たすために競馬にのめり込み、心身共に疲れはてて死んでゆく。この短編の母親も“the devouring mother”の一人といえよう。

## 参考文献

Lawrence, D. H. *Sons and Lovers*. Cambridge UP, 1992.

————————. *The Collected Letters of D. H. Lawrence I* ed. Harry T. Moore. Heinemann, 1977.

————————. “The Lovely Lady”, *The Woman Who Rode Away and Other Stories*. Cambridge UP, 1995.

————————. “The Rocking-Horse Winner”, *The Woman Who Rode Away and Other Stories*. Cambridge UP, 1995.

Harris, Janice Hubbard. *The Short Fiction of D. H. Lawrence*. Rutgers UP, 1984.

Pater, Walter. *The Renaissance, Studies in Art and Poetry*. Kenkyusha, 1929.

Ruderman, Judith. *D. H. Lawrence and the Devouring Mother*. Duke UP, 1984.

河合隼雄『ユング心理学入門』培風館，1986.

福原泰平『ラカン――鏡像段階』講談社，1998.

『英語研究』63．研究社，1975.

『文化と言語』58．札幌大学外国語学部紀要，2003.